

アーツカウンシルしずおか／アートによる空き家活用ガイドライン検討ワーキング

<第4回>議事録

<概要>

日時：2025年2月18日(火)10:00～12:00

場所：みしま未来研究所

参加者：座長・山田知弘（有限会社日の出企画）、鈴木大介（吉原マネジメントオフィス株式会社）、  
兒玉絵美（NPO 法人クロスメディアしまだ）、辻琢磨（合同会社辻琢磨建築企画事務所）

ゲスト：後藤昇（株式会社リビングディー第一建設）、坂本剛宏（三島信用金庫、さんしんキャピタル株式会社）、三好明（株式会社マチモリ不動産）、山森達也（株式会社シタテ・「fresh air」モデルプログラム受託事業者）、清水玲（アーティスト・「fresh air」モデルプログラム参加アーティスト）

オブザーバー：鈴木武仁（三島市 産業文化部 文化のまちづくり課）、杉山玲央（三島市 産業文化部 商工観光まちづくり課）、西村句（掛川市 協働環境部 文化・スポーツ振興課）、小谷大矢（掛川市 都市建設部 都市政策課）、朝倉大貴（御殿場市 都市建設部 建築住宅課）

事務局：戸井田雄（混流温泉株式会社）、大杉晃弘（写真と、企み）、立石沙織（アーツカウンシルしずおか）、若菜ひとみ（アーツカウンシルしずおか）

議事録作成者：大杉晃弘

<参考資料>

- ・フローチャート案 ver08. pdf

<意見交換 議題>

1. アートによる空き家活用の目的と2カ年の流れ
2. 2024年度ワーキングの議論の共有およびフローチャート案に関する説明
3. アートによる空き家活用のフローチャート案について
4. オブザーバーからのコメント
5. 委員からのコメント

<意見交換 内容>

1. アートによる空き家活用の目的と2カ年の流れ（立石）
  - 静岡県内で、アートを媒介に、社会の様々な分野で化学反応を起こし、地域の活性化を促す取り組みを進めていきたい。
  - 空き家に注目した理由。
    - 1) 2023年に施行された「空家等対策の推進に関する特別措置法」を受け、空き家の有効活用を考える所有者を増やす契機となるか。
    - 2) 空き家所有者が活用を決意するきっかけとして、アートの力が有効だと考えられる。
  - アーツカウンシルしずおかがアートプロジェクトを推進する理由。
    - >アートを通じて、地域のさまざまな人々が協力し、何かを生み出す機会を創出する。

＞作品を共に作るプロセスを大切にし、そこで生まれる出会いの化学反応が地域や社会に還元される。

＞自らの創造性に気づき、地域のさまざまな場面でイノベーションを起こすきっかけを創出する。

- 静岡県では、アーティストやクリエイターが活動できる場や機会が少なく、以下の問題が生じている。

＞アートプロジェクトが立ち上がっても、アーティストは県外からの招聘が多い。

＞招聘にかかるコストが大きく、コミュニケーションも日常的に取りにくいいため、プロジェクト継続のハードルとなっている

- アートによる空き家活用パイロット事業「fresh air」では、モデルプログラム（実証実験）、ワーキング（調査・考察）を実施している。

＜実施例＞

- ・ 東伊豆町稲取地区：「第2回イナトリ・アート・フェス」を開催し、文化や魅力を発信。

<https://artscouncil-shizuoka.jp/news/9165/>

- ・ 三島市：アーティスト清水玲による「窓をあける -習い合わさる ことのため-」を開催。

<https://artscouncil-shizuoka.jp/news/9267/>

- 昨年度のワーキング（調査・考察）で見出したことは下記のとおり。

＞クリエイティブ人材（アーティスト）の力

1) 「マイナスをゼロ、またはプラスへ」。クリエイティブ人材は、一般的な不動産市場では、価値が認められにくい物件にも、新たな価値を見いだす発想力を持つ。

2) 「地域を巻き込む力」。物事を深く掘り下げる姿勢や熱意が、周囲を巻き込んでいく。

＞長期間放置された空き家に対しては、活用の特続性や収益性を一旦留保し、低コストで試行可能なアートプロジェクトを実施する柔軟性が有効。

＞クリエイティブ人材の能力を最大限に生かすためには、空き家活用の初期段階から関わってもらうことが重要。

＞空き家の活用には、法的・地域的な事情に加え、所有者の家庭事情などが複雑に絡み合うため、不動産や建築などの専門的な知識を持つ中間支援組織が必要である。

- 現在構想中のガイドラインでは、地域振興や、まちづくりを手がける事業者を対象とし、アートをまちづくりの一手段として提案していく。（具体的なアウトプットの制作は次年度を予定）

＞ガイドラインの先行事例

1 ヨコハマ芸術不動産

<https://yokohama-art-real-estate.jp/>

2 「×ART（かけるアート）スタートアップガイドライン」

<https://www.meti.go.jp/press/2023/02/20240222007/20240222007.html>

## 2. 2024年度ワーキングの議論の共有およびフローチャート案に関する説明（戸井田）

＜導入（p.1）＞

- 業種によって、同じ空き物件を見ても評価するポイントが異なる。
- 不動産事業者、まちづくり事業者、アーティストは、それぞれ異なる価値基準を持っており、その違いを生かすことで、従来の不動産的な視点では価値や活用方法が見いだせなかった空き物件に、アートという新たな視点から具体的な活用方法を見いだせるのが、「アートによる空き家活用」の可能性である。

<空き物件が生まれる不動産的な課題とアートができること (p.2) >

- 不動産事業者、まちづくり事業者、アーティストの立場によって、空き物件の見え方は異なる。
- 空き物件が活用されない理由を分類し、それぞれに対して不動産的な活用と、アートによる活用を整理し、アートによるメリットを記載したフローを作成した。

<事例紹介>

- 希望家賃が高い「ATAMI ART GRANT」(熱海市) <https://atamiartgrant.com/>
- 築年数が古い「最小文化複合施設 HAGISO」(東京都・谷中) <https://hagiso.com/hagiso/>
- 大家に活用の意思がない「混流温泉文化祭」(熱海市) <http://konryu-onsen.com/in-passage/>
- 立地が悪い「原泉アートプロジェクト」(掛川市) <http://haraizumiart.com/>

<まちづくり事業者が行いたいことと、その課題(熱海市の場合) (p.3) >

- まちづくりの課題は地域によって異なる。
- 熱海では、「スモールエリア(任意のエリア)」を設定し、そこで使える物件をピックアップし、エリアの課題と照らし合わせながら、実現可能なコンテンツを企画。  
「guest house MARUYA」<http://machimori.jp/case/maruya/>

<p.4、アートによる空き家活用とまちづくりとしての可能性 (p.5) の説明>

- 「アートによる物件活用」と「まちづくり事業者が行いたいこと」が重なり合うことに気づき、それをまとめたものが4ページのフローチャートである。
- 極論を言えば、「アートで空き家を活用することで、まちづくりでやりたいことも実現する」と言える。
- この視点を軸に、ガイドラインのフレームワークを作成。

<展望>

- 「築年数が古い」「荷物が捨てられない」「改修費が出せない」といった課題を、地域のコンテンツを増やすための資源と捉えることができる。まちづくり事業者がアートを通じこの考え方を持つことも、アートの可能性の一つといえる。
- アートによる空き家活用の延長線上には以下のようなものが考えられる。
  - > 空き家活用を通じて、地域住民が文化に触れる機会の創出
  - > アートプロジェクトを開催することで、地域外の人々を呼び込める。
  - > さらに、地域内で新たな人と人のつながりを生み出し、市民一人ひとりの居場所を創出。
- 次年度以降では、「具体例や参考事例」「予算計画」「組織づくり」などを組み込むことで、以下を提供したい。
- 空き物件所有者に対し、「アートを活用してみよう」と思わせるきっかけを作る。
- まちづくり事業者に対し、「アートを導入してみよう」と思わせる入口を提供する。

### 3. 意見交換(アートによる空き家活用のフローチャート案について)

(戸井田)

- 不動産的な課題、アートプロジェクトにとどまらない事例、フローチャートの流れなどについて議論していただきたい。

(山田)

- 昨年度のワーキンググループは、空き家を扱う建設業者や不動産事業者を含め、ビジネス寄りの関係者を中心にメンバーとして就任いただき、意見交換を実施した。そこでの議論をふまえて、今年度のワーキンググループで話してきた内容について客観的な意見をもらうため、最終回となる今回は昨年度のメンバーにもお集まりいただいた。
- 今年度は、まちづくり事業者を中心に、空き家対策、アート、建築に関わる方々が集まり、アートの文脈やソーシャルビジネスを意識した議論を進めてきた。
- 不動産事業者の視点では、空き家の評価基準は主に「家賃」と「立地」。この点について、不動産・建設業界の最前線で活躍する後藤社長に意見を伺いたい。

(後藤)

- 最大の問題は、物件所有者の活用意識の欠如にある。活用や売却の提案をしても前向きでなく、家族や親族との意見調整がまとまらず話が進まなくなるケースもある。
- 物件所有者は、不動産事業者に「家賃はこれくらいで（利用者を）募ってほしい」と言うだけで、結果として空き家のままになっている。
- 不動産事業者は面倒な手続きや交渉を避けたいという意識が強く、「賃料を下げる」といった単純な方法しかとらない。
- まちづくり事業者などと連携しなければ、空き家問題の解決は難しい。
- 空き家活用は非常に手間とコストがかかるため、不動産事業者単独では積極的に取り組みにくい。

(山田)

- まちづくり事業者の視点として、まちづくりは最終的にソーシャルビジネスに行き着く。
- ソーシャルビジネスには大きく2つの方向性がある。
  - > 社会性を重視したソーシャルビジネス
  - > ビジネスの視点を取り入れたソーシャルビジネス
- まちづくり事業者の視点では、「立地」と「自由度」が重要と考えるが、金融機関の立場から坂本さんの意見を伺いたい。

(坂本)

- 空き家は多く存在するが、民間事業者や地域の人が動いても、実際に借りられるケースは少ない。
- 銀行が第三者として仲介し、賃貸を促すケースはあるが、ビジネスとして成立するかどうか審査基準となるため、資金調達のハードルは高い。
- 地域で信頼を得るには長い時間がかかるが、一瞬で関係が崩れるリスクもある。そのため、「地域のキーマン」を探し、協力してもらえるかが重要。
- 過去に空き家活用を試みて失敗した経験がある地域では、ネガティブな印象が残り、新たな取り組みが進みにくいこともある。
- まずは、地域の課題を探り、空き家活用が本当に役立つのか、地域住民と議論することが必要。その上で、アートを活用できる人材をどれだけ集められるか、どの程度にぎわいを創出できるかが成功の鍵となる。

(山田)

- アートとソーシャルの視点のバランスについて、兒玉さんの意見を伺いたい。

(兒玉)

- 空き家活用には、不動産事業者の視点とアーティストの視点のバランスが不可欠。
- 重要なのは「空き家を埋めること」ではなく、空き家にまつわる個人の記憶や歴史を、現在のまちと結びつけること。それがまちの文化やアイデンティティを育む「土壌の耕し」につながる。それがアーティストの役割。
- ビジネス視点だけで空き家を「箱」として捉えると、アーティストとまちづくり事業者の間でズレが生じる。このギャップを埋めるため、コーディネーターの存在が重要となる。
- アーティストを生かすためには、「地域住民の思いを受け継ぐ」「かつての記憶を可視化する」「空き家を通じて、アーティストに生活が引き継がれる」などが重要。こうした視点を、まちづくり事業者にも共有していくことが求められる。

(山田)

- 熱海で空き物件活用に携わる三好さんに、空き物件を評価する視点について伺いたい。

(三好)

- 空き家を活用しただけで、まちの課題が解決するとは限らない。そもそも「そのまちが何に困っているのか」という視点が出発点となる。
- 例えば、空き家が活用されて一時的に盛り上がりつつも、それがまちにとってインパクトがなく、変化をもたらさなければ、まちづくりとは言えない。
- 熱海の事例では、中心市街地の価値を高め、不動産価値を向上させることで、固定資産税の増収やコンパクトシティの実現を目指し、空き家や空き店舗を活用した。
- 初期段階では、賃貸に出しても借り手が見つからず、不動産事業者や工務店にとってもビジネスにならない。しかし、アーティストにとっては「面白い場」になり得る。
- 「どのタイミングで、誰が関わるのか」という、時間軸の設計が非常に重要。

(山田)

- まちづくり事業者の立場から、鈴木さんに空き物件を評価する視点を伺いたい。

(鈴木)

- 空きビル活用プロジェクト「\_ for now」(フォーナウ)の取り組みとして、富士市内にある紙内田ビルを半年間無償で借り上げ、新規開業希望者やアーティストに暫定利用してもらっている。
- 空き店舗があるからといって、単純に「アトリエとして活用しよう」と呼びかけても、収益性や、そこでする意味が曖昧なため実現しにくい。
- まちにとって人を集められるアーティストは、「ポジティブな影響をもたらす存在」。
- 活動の根幹にはソーシャルな視点があるが、持続性を考えると、最終的にはビジネスとして成立させる必要がある。ビジネスの根幹にソーシャルな軸があれば、どんなビジネスであっても「ソーシャルビジネス」だ。

(山田)

- フローチャートには「不動産的なビジネスの視点」と「まちづくりのソーシャルな視点」の2つを導入した。
- まちづくり事業者が活用する際、それぞれの立場で何を考え、どう動くのかを明示することで、より実用的なガイドラインになるのではないか。

- 不動産を評価する際、建築的な視点とアーティスト的な視点の違いについて、辻さんに意見を伺いたい。

(辻)

- 私自身は建築の立場ですので、アーティストの視点をそれほど把握しているわけではないが、どの空き物件にも、所有者ごとの面白いエピソードがあるので、アーティストにとってはそうした文脈をどう拾えるかが大事かと思う。加えて、原状復帰がないことも、アーティストにとっては重要ではないか。
- 今回のワーキンググループで最も創造的だったのは、「アートが大家の意識を変え、相続対策の行動を促す可能性がある」という議論。
- 「家賃を下げる・上げる」といった不動産の解決策は自明であり、必ずしも明記する必要はない。それよりも「アートが相続問題を真剣に考える入口になり得る」という点を強調した方が有益。
- まちづくりは「狙ってできるもの」ではなく、経済活動が継続した結果として自然に生まれるものだと私は考えている。公的組織が計画的にまちづくりを主導するのはとても難しいが、むしろ相続対策のように、確実に到来する社会的な課題の支援や対策を行うことが、最も公共性に資するのではないか。
- アートは、まちづくりという大義名分を背負わせることで、空き家を動かしていく際の強い動機となり得る。しかしまちづくりはあくまでも大義名分で、実際は相続対策に資するという点が重要。
- まちづくりの主体も、この視点を理解し、アートという言葉を適切に使用することが重要。

(山田)

- 三島で今年度アートによる空き家活用「fresh air」のモデルプロジェクトを進めている山森さんに、実際にチャートを活用する立場から意見を伺いたい。

(山森)

- フローチャートを見ると「アートを活用した方が良い」と感じるが、現実には実行に移されないことが多い。その理由の一つが「資金の回し方の難しさ」がある。
- アートプロジェクトは公共性が高いため、完全にビジネスの枠組みだけで運営して良いかは疑問がある。重要なのは、アートを「金稼ぎの道具」にしないこと。一方で、プロジェクトの継続には資金が必要であり、そのためのビジネス的な工夫も求められる。
- 例えば、直接アートで利益を生み出すのではなく、その周辺（空き店舗の活用、教育プログラムなど）で収益を確保し、アート活動に還元する仕組みが必要。
- ガイドラインは「空き家活用までのプロセス」が詳しく書かれているが、活用後の「資金の循環」や「アートへの還元」についての視点が不足している。これを明記することで、持続可能な仕組みとして機能するのではないか。
- 築年数が古い物件や活用されていない場所こそ、アートの活用価値が高く、こうした「まちの隙間」こそ、まちの可能性であり、プレイヤー側が持つべき視点だ。

(山田)

- アーティストの視点で空き家活用の可能性について、清水さんの意見を伺いたい。

(清水)

- フローチャートにある「自由度」や「原状復帰の不要性」は、アーティストにとって優先順位が高い。
- 空き物件の自由度には「空間としての自由度」だけでなく、例えば不動産的に価値の低い物件を、アーティストがあたかも救世主であるかのように提供される状況というような、「アーティストに向けられる期待に関する自由度」もあるのではないかと。
- アーティストはあまり期待されなくても、必要なものは自ら調達し、地域とつながりながら活動を展開できる。
- 「アーティストが困った空き物件を解決する存在である」と、最初から決めつけない自由度も重要だと感じている。

(山田)

- 連携しやすいまちづくり事業者とはどのような視点を持つのか、行政の立場から御殿場市の朝倉さんに伺いたい。

(朝倉)

- 公的な視点を持っている事業者は、行政との連携が取りやすい。建築など、特定の分野に特化しすぎると、利益の偏りが生じやすいため、バランスを持って利益を還元する仕組みが望ましい。
- 行政としては、市民に対して「なぜこの事業者なのか」を説明できることが重要。
- ガイドラインの対象者についての疑問として、すでに活躍している事業者だけが対象なのか？それとも、まだ実績のないスタートアップや個人でも活用できるものなのか？もし後者も対象であれば、ガイドラインには初心者向けのサポート情報も含めるべきではないかと。

(山田)

- 質問の返答として、今回のガイドラインは、あくまで「きっかけづくり」のためのもの。これを見ればすべてが分かるというより、議論のきっかけや、空き家活用について話し合うためのツールとして活用してほしい。
- まちづくりを進める上で、アーティストの視点をまだ取り入れていない事業者にとって、新しい発想のきっかけになればと考えている。
- 4ページの図にある、4つのポイントについて意見を伺いたい。

(後藤)

- 建設会社としてアートを活用しているのは、もともとアートが好きで、作家とのつながりを持ち、アートを取り込むことで、会社の価値を高めることができた。
- アートは、地域の歴史や文化と結びついた方が良いという意見に同意する。例えば、地元の紙を使い絵はがきを作ることは地域住民にも分かりやすく、アートに対する理解が深まる。
- 「アートは分からない」と感じる人でも、地域の歴史的な文脈を生かした活用方法なら、その価値を理解しやすい。
- 建物の価値向上を目的としたリノベーションの一環として、アートを活用して建物の価値を高めることで、賃貸価格を上げ、投資を促すことが可能。

(山森)

- 空き物件を暫定利用することで、地域の人々にとって「初めてアートに触れる機会」が生まれ、大家側もアートに愛着を持ち、アーティストへの理解が進むという好循環が生まれる可能性がある。

(後藤)

- かつて、レセプションなどの交流機会を設けたことで、これまで接点のなかったアーティストのコミュニティとつながりを持つことができた。
- 大家とアーティストの関係性の構築が重要であり、初期の関係構築をサポートできれば、両者の連携が進む可能性がある。最終的には、気持ちの問題が大きいのではないか。

(山田)

- アーティストと関わる中で、その視点の広さに驚いている。例えば、通常の不動産事業者が敬遠する雨漏り物件でも、アーティストは「屋根をくり抜いてシダ植物を植え、そこを外空間として活用する」といった発想を持つ。危険性などの課題はあるが、こうした自由な視点が空き家活用の可能性を広げるのではないか。
- 地域のコンテンツが増えるという観点から、兒玉さんの意見を伺いたい。

(兒玉)

- フローチャートの「使える物件が増える」「地域のコンテンツが増える」「まちのプレイヤー（関係人口）が増える」といった項目は正しいが、単なる成功事例を増やすだけでは、アートならではの魅力が伝わらない。
- 「アートによる空き家活用」と言っているが、ワクワクしないのはもったいない。
- アーティストやアートの魅力は「予測不能性」にある。
- アーティストが地域に入り、そこで生まれる作品を通して、住民が「自分たちの町は悪くない」「ここに住んでいて良かった」と思えるようになることが重要であり、そのマインドの変化こそ、アートが地域にもたらす最大の効果。
- 芸術祭「UNMANNED 無人駅の芸術祭／大井川 (UNMANNED EXHIBITION)」では、空き物件にただアーティストを呼ぶのではなく、アーティストの作品プランを考慮しながら、空き家が持つ歴史や背景などを鑑み、マッチングさせている。
- 地域の土壌を耕すことに、アートの可能性がある。
- 予測不能な存在であるアーティストが地域に入り込むことで、新たな価値が生まれる。
- アーツカウンシルしずおかは、その可能性を最大限に生かす役割を担うべきではないか。

(山田)

- 同じく芸術祭を開催している山森さんの意見は。

(山森)

- フローチャートでは「大家」と「まちづくり事業者」が図の中央で重なるが、それは空き家単体の話に過ぎない。実際には、「アートが地域に与える影響」と「空き家の活用」が、縦軸でも重なって考えると考える。
- 兒玉さんの芸術祭のように、アーティストに自由なプランを作ってもらった後で、適切なマッチングを用意できる空き家があることに驚かされる。

(兒玉)

- アーティストを選定する際は、プランだけでなく、地域へのまなざし、作品を作る手法など、アーティストの人となりも含めて選定している。

(山田)

- 空き家対策では、どうしても「困っている物件が一つあり、それをどう活用するか」という話になりがち。しかし、マッチングとは本来、複数の選択肢がある中から最適なものを選ぶプロセスであり、選択肢が一つしかない場合、それは「マッチング」とは言えない。
- アーティストの受け入れ体制について、清水さんに伺いたい。

(清水)

- 受け入れ体制が整っている環境では、アーティストは制作に集中しやすく、地域を知るスピードも速い。逆に、地域の人々がアーティストを警戒している場合、信頼を築くまでに時間がかかる。
- まちの記憶や住民の思い出を共有できる関係を築くには、根気強いコミュニケーションが必要。
- 三島の展示では、当初予定していた物件が使えなくなるトラブルがあったが、急遽別の場所に変更し、最終的に展示を成功させることができた。これは、三島というまちの特性や、地域で長年活動してきた山森さんの存在が大きかった。
- アーティスト単体ではなく、地域との関係性がプロジェクトの成功を左右する。

(山田)

- 空き家が動き出す現場を数多く見ている坂本さんに、「使える物件が増える」という点について意見を伺いたい。

(坂本)

- 「使える物件が増える」という表現は、不動産的な優良物件の増加を意味しているように捉えられるため、「選べる物件が増える」の方が適切ではないか。
- 空き家活用の自由度について、現状のフローチャートでは十分に表現されていないため、より広がりのある表現が望ましい。
- 文章を増やすのではなく、一言でさまざまな発想を喚起する言葉を選ぶことが大切。
- フローチャートだけを見ても分かりにくい部分があり、「地域をどう動かすか」という大きな枠組みの中の一つとして、アートを使った空き家活用が位置づけられるべき。
- まちづくりを始める人が、ゼロから何をすれば良いのか分からない状況を踏まえ、アートに限らず、もう少し広い視点での説明が必要ではないか。
- アートイベントを単発で終わらせるのではなく、地域の人々が継続して開催できる仕組みを考えることが重要。「継続して開催するには何が必要なのか」「どこと連携すれば事業として成り立つのか」という視点をガイドラインに盛り込め必要がある。

(山田)

- 空き家活用を進める上で、関係者がワクワクし、動きたくなることが最も大切。
- 大家は「この人なら貸しても良い」と思える相手が現れるかどうかを重視しており、それをサポートする体制が必要。
- 「余白のあるガイドライン」を作り、各地域や関係者が自由に解釈し、使いこなせるものにすることが重要。

#### 4. オブザーバーからのコメント

(三島市役所 鈴村)

- まちづくりについて、多角的な視点で考えられていることに感謝。皆さんの議論が反映されたガイドラインの完成を楽しみにしている。

(三島市役所 杉山)

- 行政にとって重要なのは、「地域課題の解決」「にぎわいの創出」「その他の社会的な波及効果」など、市民への還元。行政としてサポートできる部分があれば、積極的に関与したい。

(御殿場市役所 朝倉)

- ガイドラインを初めて見たが、非常にワクワクする内容だった。読んだだけで想像が膨らみ、可能性を感じる。ガイドラインを市民に配布し、それぞれの解釈でイベントを生み出すような仕組みを作りたい。

(掛川市役所 小谷)

- この分野は、明確なゴールを定めることが非常に難しいが、さまざまな分野の方々の意見が交わされ、「人をどう動かしていくか」という点について深く議論できたことが、とても有意義だった。
- 空き家活用において「建物の価値向上」は重要な視点。物件所有者との対話では、「残置物の処理」が大きなネックになっているケースが多く、どのようにすれば、所有者が前向きに考えられるかを伝えることが大切であり、今回のワーキングは参考になった。

(掛川市役所 西村)

- 行政としてどのように関わるべきかを常に考える必要があると実感した。

## 5. 委員からのコメント

(兒玉)

- 皆さんの拠点で議論できたのが印象的で、異なる視点を持つ人々と対話できたことが貴重な経験であり、多くの学びがあった。

(鈴木)

- 実際に現場を見ながら議論を進められたことが良かった。皆さんの考えをインプットし、次に生かしていきたい。

(辻)

- 私が考えるアートは、「わかりやすい価値」というよりも、人々それぞれの考え方や感情に影響を与え得るものであり、「生きる歓び」「新たな気づき」「反省」など、根源的な世界への眼差しを提供することが現代アートの重要な役割。
- まちづくりとアートの関係を考える上で、アートの定義そのものをアーツカウンシルしずおかがしっかり示していくことが重要ではないか。

(山田)

本日のワーキンググループでの意見交換は、これで終了とさせていただきます。

貴重なご意見をいただき、ありがとうございました。